王陽明の生涯

——朱子からの自立——

橋本敬司

はじめに

王陽明思想は、一般的には陸象山思想との類似性において捉えられる。しかし、陽明に朱子・朱子学を意識した言説が多いことからしても、象山よりむしろ朱子の方が陽明にとって大きな存在であったことは明白である。これは、思想形成過程で、批判克服の対象として王陽明の前に厳然と存在し続けていたのが、朱子その人と朱子学であったことを意味している。王陽明の思索の営みに、常に活力を与え命の息吹を送り続けていたのは、外ならぬ朱子・朱子学だったのである。

致良知を説くに至った陽明は、それが自らの「百死千難」の体験の中から生まれたと言っていた。つまり、自らの存在を懸けた命懸けの体験が、陽明の哲学的思索を深めさせ、思想形成に極めて重要な役割を果していたのである。

従って、王陽明の思想を研究するためには、その「百死千難」の体験と朱子・朱子学が、陽明にとってどのような意味をもっていたか、まず理解しておかなければならない。ここでは、存在の根源に触れ生命の危機にさらされた「百死千難」の体験と、それに深くかかわっていた朱子・朱子学が、陽明にどう影響し、またどのような存在意味をもっていたかを明らかにすることを通して、「致良知」説を展開し独自の世界観①を形成するまでの陽明の心の軌跡を、解明してみたい。

（一）　朱子学との出会い

『年譜』王陽明十一歳の条に、陽明と塾師との問答、それに対する父龍山公の語が載せられている。

嘗問塾師曰何為第一等事。塾師曰惟讀書登第耳。先生疑曰登第恐未為第一等事、或讀書學聖賢耳。龍山公聞之、笑曰汝欲做聖賢耶。

何が第一かと問う陽明に、塾師はただ読書勉強して科挙に合格することだと答える。陽明はそれを疑い、科挙に合格することが第一ではなく、読書して聖人賢者を学ぶことこそ第一だ、と言う。この事を聞いた龍山公は陽明に、お前は聖人賢者になろうなどと考えているのか、と笑いながら言った。

龍山公の言葉に表された、聖人賢者に「なる（做）」という考え方は、婁一齋との出会いにより陽明の中で確実になる。

「謁婁一齋諒。語宋儒格物之學、謂聖人必可學而至。遂深契之」（『年譜』十八歳条）婁一齋に会った王陽明は、宋儒の「格物」を、聖人になる方法として実践すべく、心に深く決意した。

宋儒の「格物」とは、勿論朱子の格物論だが、ここで、朱子の聖人観及び格物論を見ておきたい。「學者是學聖人而未至者。聖人是爲學而極至者」（『朱子語類』巻二一）。学者とは、聖人を学びながらまだ聖人の域に達しない者であり、聖人とは、学んでそれが究極にまで達した者である、と朱子は言っていた。聖人とは、学問を重ねて到達した究極の人間存在であった。この言葉は、朱子学の枠組の中で捉えられた、聖人像と学者の姿とその両者の関係を端的に語っている。

朱子によれば、聖人になる学問的方法論が即ち「格物」であった。いわゆる「格物補伝」を読んでみよう。

是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無

不明矣。此謂物格、此謂知之至也。（『大学章句』）

『大学』の最初の教えは、学者に既に自明の理を敷延して天下の万物の理を極めさせることであり、その努力を怠らず続けてゆけば、学者はある日ある瞬間を境にして、豁然と余す事なくすべての物の理に通じ、また同時に自分自身の心の全体もすべて明らかになる。これが「物格・知至」である。

朱子において、知の工夫である「格物」は、心の工夫である「居敬」と共に、聖人になる方法論の一翼を担う重要な概念であった。しかし、それはあくまでも方法に過ぎず、聖人になるには、ある瞬間における豁然貫通が不可欠であり、これを体験しなければ、決して聖人になることはできない。

「格物」を方法にして「聖人になる」と考える朱子学において、聖人は、常に価値的に学者を超えた高いところに存在し、一方学者は、聖人になる唯一の方法である「格物」を通して聖人の学を学びながらも、常に自らを「未至者」として感じ続ける存在でしかない。つまり、聖人は、豁然貫通の体験により、学者の自己を超えた存在として、自己の外に対象化され聖化されてしまっていたのである。ここには、結局誰一人として、聖人になることなどできない、絶望の構造があるだけである。このような図式の中では、「格物」を方法として、陽明が聖人になろうと実践すればするほど、かえって聖人は遠い存在として意識され、一方陽明は聖人になることの困難さにただただ圧倒されるばかりで、自己の無能さを痛感し、絶望の淵に身を置く外ないのである。

（二）　挫折体験—朱子コンプレックスの形成—

朱子学の「格物」を実践したときの挫折体験が、『年譜』二一歳の条に記されている。

徧求考亭遺書讀之。一日、思先儒謂衆物必有表裏精粗、一木一草皆涵至理。官署中多竹、即取竹格之、沈思其理不得、遂遇疾。先生自委聖賢有分、乃随世就辭章之學。

婁一齋との出会いで、宋学に目を開かされた王陽明は、二十一歳になって朱子の著述を読み、その「格物」の方法に倣って、官署に生えていた竹の理を極めようと沈思するが、理を得ることもできず、ついに発病してしまった。

挫折により一旦朱子学を離れた陽明は、世の風潮に従って科挙試験の為に辞章の学を学びはするが、道に達するための学問ではないと悟り、二十七歳で、再び朱子学の「格物」により聖人になろうと試みた。『年譜』二十七歳の条。

一日讀晦翁上宋光宗疏有曰、居敬持志、爲讀書之本。循序致精、爲讀書之法。乃悔前日探討雖博、而未嘗循序以致精、宜無所得。又循其序、思得漸漬洽浹、然物理吾心、終若判而爲二也。沈鬱既久、舊疾復作、益委聖賢有分。

ある日、朱子の、宋の光宗に奉る疏に、心の工夫である居敬持志が学問の根本であり、順序に従って徐々に精緻になるのが学問の方法です、とあるのを読んで、以前竹の理を求めた時は、その手順を欠いていたと反省し、今度は順序に従って徐々に理を求めようとする。しかし、結局物の理と自己の心の一致は得られず、分裂して二つの物に感じられるだけであった。長い間そのことを悩んでいるうちに、病がまた起こり、益々聖人賢者になるには天分が必要であると痛感するに至る。

再度の挫折によって、朱子学はもはや学んで聖人になるための単なる方法ではなく、反って、陽明自身の存在すら脅かすものとして、陽明の心に深く刻み込まれたのである。

この挫折体験とそれを齎した朱子・朱子学が、後の陽明にいかに大きな影響を与えたか、陽明の告白を見てみよう。

我着實曾用來、初年與錢友同論做聖賢、要格天下之物、如今安得這等大的力量。因指亭前竹子、令去格看。錢子早夜去窮格竹子的道理、竭其心思、至於三日、便致勞神成疾。當初説他這是精力不足、某因自去窮格、早夜不得其理、到七日亦以勞思致疾、遂相與嘆聖賢是做不得的、無他大力量去格物了。（『傳習録』下）

かつて朱子学を学んでいた頃、陽明は友人錢氏との議論の末、

聖賢となるために朱子の格物論を実践した。まず銭氏が庭の竹の理に極め至ろうとしたが、三日目で疲れ果て病気になった。つぎに陽明も試みたが、ついに理に至ることができず、七日目に、疲労困憊の末病気になってしまった。結局、二人とも聖賢になる大力量を備えていないと嘆く外なかった。

その体験から、陽明は、主体が自らの知を発揮しつ「物」の理の認識を積み重ねてゆくことで聖人になる、とする朱子学的世界では、心と理はそれぞれ主体と物とに別れて在る、としか感じられなかった。竹は、陽明が見続けることを空しくさせたように、あくまでも主体とは無関係に、自己に固有の理を備え、それ自体で存在している。それは、見る行為を空しくさせることで、陽明自身の存在を不確かなものとして動揺させることにもなった。

心と理とが二つに分断された朱子学的世界において、主体と客体は、それぞれ無関係に独自で存在するのみで、主客の密接な関係の中でその存在を互いに顕示することはない。たとえ関係が在ったとしても、それは既に礼・規則として固定化・形式化された実体的関係に過ぎず、世界は、主体である自己とは無関係に既に存在しているのである。

朱子学において、聖人賢者になるには、長期間にわたる格物窮理の積み重ねと、豁然貫通という決定的認識転換の体験が不可欠であった。聖人賢者になる唯一の方法だと思えた朱子の格物論が、かえって、陽明に自らの能力の限界を痛感させ、このうえない無力感と絶望感を味わわせた。同時に、聖人賢者になるための方法論として自己の外面に在ったはずの朱子学が、この体験により、内なる他者即ちコンプレックスとして新たに内面化された。陽明は生涯、自らの能力を超えた学問体系である朱子学を、是非とも批判克服してゆかねばならないものとして、意識せざるを得なくなったのである。

先の陽明の告白の後半は、次のようなものであった。

及在夷中三年、頗見得此意思。乃知天下之物、本無可格者、其格物之功只在身心上做、決然以聖人爲人人可到、

便自有擔當了。（同上）

陽明は貴州の龍場に流されること三年にして、「格物」とは、対象である物に至ることではなく、ただ自己の身心において実践されなければならない、と悟った。そうすることで、人は誰でも聖人たりうるとし、自らそれに当たることにしたと、自己の到達した境地を述べている。

致良知説を提唱した後のこの告白から、陽明にとって、朱子の「格物」に挫折した体験と、龍場に流された体験が、非常に大きな意味を持っていたことがわかる。これは、陽明が主体的実践を通して、自己の存在をリアルなものとして実感しようとしていたこと、この蹉跌を経て陽明が到達した、良知の働きのままに自己の存在をリアルに実感できる世界観が、朱子学の世界観を批判克服して、新たに形成されたことを明確に表している。

この挫折体験は、自らの外に聖人になる方法を求めていた自己が死に、内面化した朱子・朱子学と対決する外ない新たな自己が誕生するといった、陽明の心の中での死と再生の物語りであった。従って、生涯、死と再生を繰り返しながら真の自己を見いだしてゆこうとする陽明の心の変容過程において、朱子コンプレックスを形成したこの体験こそ、紛れもなく陽明が独自の世界観を形成してゆく出発点になり得たのである。

（三）　龍場体験——自立へ向けての覚醒——

朱子・朱子学を乗り越えてゆくには、かつて挫折を齎した朱子の「格物」を克服しなければならない。龍場での生活体験が、「格物致知」の本旨を悟る機会を陽明に齎す。

龍場在貴州西北萬山叢棘中、蛇虺魑魅蠱毒瘴癘與居。夷人鴂舌難語、可通語者、皆中土亡命。舊無居、始教之範土架木以居。時瑾憾未已。自計得失栄辱皆能超脱、惟生死一念、尚覺未化。乃為石墩自誓曰、吾惟俟命而已、日

夜端居澄默、以求静一、久之、胸中灑灑。而從者皆病、自析薪取水、作糜飼之。又恐其懐抑鬱、則與歌詩、又不悦、復調越曲、雑以詼笑、始能忘其為疾病夷狄患難也。因念聖人處此、更有何道。忽中夜大悟格物致知之旨、寤寐中若有人語之者、不覺呼躍、從者皆驚。始知聖人之道、吾性自足、向之求理於事物者誤也。(『年譜』三十七歳条)

龍場とは、貴州西北の荊棘が生い茂る山間にあり、魑魅魍魎・蠱毒・瘴癘と共におり、言葉が通じるのは中土から逃亡して来た人だけだった。そこは住居もなく、始めて木造の家を造らせた。このような地で、陽明は、世俗的な得失栄辱はなんとか超越できたが、ただ生死に関する一念は捨て切れずにいた。そこで、石墩をつくり、ただ天命を俟つだけだと誓い、日夜端然として澄黙静坐し、静一を求めたところ、しばらくして胸中がさっぱりした。ところが、陽明の従者達は、皆病気になり、陽明自らが薪を折り水を汲み粥を作って食べさせた。また、彼らの気が滅入るのを心配して、詩を歌い、それでも喜ばないと、越の俗曲を歌い、冗談を交えるなどして、やっと彼らは病気と異民族の地に居るという艱難を忘れることができた。陽明は、聖人がこのような状況に置かれたなら、こうする以外に一体どうしただろうか、と考える。ある夜中、夢うつつの中で突然「格物致知」の本旨を悟り、夢の中で誰かが語りかけるように思い、不意に叫んで跳び上がったので、従者も皆驚いて目を覚ました。陽明はこの時に到って始めて、聖人の道は、自分の性に元々備わっており、かつて理を事物に求めたのは間違いだったことが解った。

生活・習慣・言葉が以前と全く異なる世界で、陽明は、自己を頼って生きる以外ないことに気付き、世俗的欲である得失栄辱を拭い去ることができた。しかし、生死つまり自己の存在に関しては、まだ心が因われていた。そこで、自覚的に、死の象徴である石の墩を作り、そこに座り続けることで、朱子学的世界の中で確立できず挫折した自己即ち朱子コンプレックスを解消する死を体験し、同時に生死を越えた新たなる

生を手に入れようとした。そして、陽明から朱子学の箍が外れた。陽明は、従者の看病をする外ない生活を通して、直接自己の生に向き合い、ついに自己の存在を見いだしたのである。

以前の陽明は、「格物」というフィルターを通して聖人に向かっていたに過ぎない。しかし、生きるしかない龍場の地で、聖人ならこのような状況でどうしただろうか、と心に叫ぶとき、ようやく陽明は自己と聖人との間に何のフィルターも介在させずに、直接聖人に向き合い、聖人を自らが生きる場の中で捉え実感しようとしていたのである。

こうして、陽明は、かつては挫折を齎した朱子学の、物の理を自己の外に措定しその理を極めながら聖人になるという格物論を、間違いであると批判克服することができた。聖人になる道は、物の理にあるのではなく、自分の中に本来十分備わっている。聖人は自己を越え自己の外にあるのではなく、自己の中にこそ存在している、と陽明は悟ったのである。

朱子的世界から追放され龍場に流されたことは、朱子・朱子学の束縛から解放され、それを相対化して捉える視線を獲得する契機を陽明に与えた。もし陽明が朱子・朱子学の世界に身を置き続けていたなら、陽明はそのフィルターを通してしか世界を見ることができず、聖人の道は自己に内在するという大悟体験は、決して得られなかったに違いない。

このように心理的・思想的な死と再生のダイナミズムが象徴的に展開された龍場体験は、陽明の朱子学に対する批判と克服の第一歩であると同時に、独自の世界観創造へ向けての第一歩であった。しかし、実は陽明の心の中にはまだ、朱子に対するコンプレックスが色濃く残っていたのである。

（四）　朱子晩年定論——朱子に依存することでの自己認定——

龍場において、朱子の格物説を克服した陽明は、その後「心即理」「知行合一」を説き、更に「致良知」を提唱することで完成する新たな世界観の創造に向けて着実に歩を進める。

一方、政治的にも、流罪が解かれ、各地の乱を平定するなど、生涯で最も活動的な日々を送る。しかし、陽明は、日毎にたかまる朱子学者からの批判に対処し、これを解消しなければならなかった。

留都時、偶因饒舌、遂至多口、攻之者環四面、取朱子晩年悔悟之説、集爲定論、聊籍以解紛耳。門人輩近刻之雩都、初聞甚不喜。然士夫見之、乃往往遂有開發者、無意中得此一助、亦頗省頰舌之勞。（与安之書）

南京在住の折、偶たましゃべり過ぎ、それを非難攻撃する者に取り囲まれたりなどしたので、朱子の晩年悔悟の説を編集し、これを朱子の『定論』として示し、紛糾を解消しただけであった。ところが、最近門人達が、それを雩都で出版したというのを聞いて、陽明はとても不愉快に思った。しかし、士大夫がそれを読んで、目を開くといった、思いがけない効果があったり、また特に説明の労をとらなくてよくなった。

陽明が言うように、『定論』が朱子学者の批判をかわす方便に過ぎなかったなら、門人が出版したことは、陽明にとっては好都合であったはずだ。ところが陽明は不愉快に思った。ここに、陽明の朱子に対する微妙な心の揺れが表れている。陽明は後に、「我在南都已前、尚有些子郷愿的意志在」（傳習録下）と、『朱子晩年定論』編纂当時の心境を告白している。陽明の心の揺れとは何か。郷愿の心とは何か。『朱子晩年定論』の序文（陽明四十七歳）を読みながら考えてみよう。

昔謫官龍場、居夷處困、動心忍性之餘、恍若有悟。證諸六経四子、洞然無復可疑。獨於朱子之説、有相牴牾、恆疚於心、竊疑朱子之賢、而豈其於此尚有未察。

以前龍場に流され、異民族との生活の中で、恍として悟り、これを六経四子に照らしてみると、何の疑いもなくはっきりしていた。しかし、朱子の考えとだけは抵触していることを、いつも心に疚しく思っていたが、心ひそかに朱子のような賢者が解ってなかったはずはないと、疑っていた。

龍場において得られた確信が、朱子の説とだけは異なって

いることが、陽明の意識の中で朱子の存在を更に大きいものにした。朱子説との不一致に陽明は苦しんだのである。

及官留都、復取朱子之書而検求之、然後知其晩歳固已大悟舊説之非、痛悔極艾、至以為自誑誑人之罪、不可勝贖。世之所傳集註或問之類、乃其中年未定之説、自咎以為舊本之誤、思改正而未及。而其諸語類之屬、又其門人挾勝心以附己見。固於諸子平日之説、猶有大相繆戾者、而世之學者、局於見聞、不過持循講習於此。

朱子の書を検討したところ、朱子は晩年に旧説の間違いを悟り後悔したが、人々をたぶらかした罪は贖えないと思うようになった、ということが解った。今流布している「集註・或問」等は、中年未定の説で、朱子はそれを改正しようと思ったができなかった。その他語類などは、門人が勝手に自分の意見を付したものである。多くの人がいつも言っている説は、やはり大いに間違っている。世間の学者は自分の見聞に偏ってしまい、朱子の未定の論を墨守し議論しているに過ぎない。

朱子の説との不一致を、朱子晩年悔悟によって一挙に解消することは、朱子以降の朱子学者に対する痛烈な批判の刃ともなったのだが、ともかく陽明は、朱子と同一であった喜びを次の様に記した。

予既自幸説之不繆於朱子、又喜朱子之先得我心之同然。且慨夫世之學者、徒守朱子中年未定之説、而不復知求其晩歳既悟之論。競相呶呶、以亂正學、不自知其已入於異端。輒採録而裒集之、私以示夫同志。庶幾無疑於吾説、而聖學之明可冀矣。

私の説が朱子の考えと異なっていないのを幸せに思う、また朱子がまず我が心と同じものを得ていたことを嬉しく思う。また同時代の朱子学者は、ただ空しく朱子の中年未定の論を墨守するだけで、晩年に悟ってからの定論を知らず、ただ喧しく議論ばかりして聖人の正しい学問を乱し、異端に染まっていることに気付かないのだ。朱子の言葉を採録収集して、ひそかに同志に見せていた。私の説を疑わないで欲しい、聖

人の学問が明らかになることを願って。

この序文には、自説と朱子説との不一致に悩み苦しんだ末に、ようやく晩年悔悟として朱子を捉え直すことで、自説と朱子説の一致を見いだし得た陽明の、朱子コンプレックスを解消しようとして苦しむ、心の軌跡が鮮明に記されている。

克服しなければならない朱子に依存して立つ外に術のない陽明にとって、『朱子晩年定論』の出版は、素直に喜べることではなかった。しかし、朱子に自己を同一化できた喜びを序文に記したように、実存的戦いを避けて、安易に朱子に同一化してしまったのは、陽明の心の底には、朱子を自説の根拠に据え、朱子に拠って立とうとする、郷愿の心即ち朱子コンプレックスが依然深く刻まれたままだったからである。

陽明の郷愿の心を象徴するこの『朱子晩年定論』を、朱子学者羅整菴は、年次考証を根拠に、次のように批判した。

第不知所謂晩年者断以何年為定。羸軀病暑未暇詳考、偶考得何叔京氏卒於淳熙乙未時、朱子年方四十有六、爾後二年丁酉而論孟集註或問始成。今有取於答何書者、四通以為晩年定論。至於集註或問、則以為中年未定之説。竊恐考之欠詳而立論之太果也。（『困知記』附録　論學書信）

何年を以て朱子の晩年と断定したのか訳が解らない、と整菴は言う。何叔京は朱子四十六歳で亡くなり、その二年後に「集註・或問」が完成する。しかし陽明は何叔京宛書簡を晩年の定論として採録し、「集註・或問」を中年未定の説とした。陽明の年次考証の甘さと「晩年」を説く非を突き付けた。

この時代考証を根拠にした批判が、朱子は晩年に以前の非を悟り悔悟したと、「晩年」の概念を持ち出して朱子に同一化しようとした陽明の郷愿の心を、激しく揺さぶった。

羅整菴の批判を受けた陽明は次のように答える。

其爲朱子晩年定論、蓋亦不得已而然。中間年歳早晩誠有所未考、雖不必盡出於晩年、固多出於晩年者矣。然大意在委曲調停、以明此學爲重。平生於朱子之説、如神明蓍龜、一旦與之背馳、心誠有所未忍、故不得已而為此。…

…蓋不忍牴牾朱子者、其本心也。不得已而與之牴牾者、道固如是、不直則道不見也。執事所謂決與朱子異者、僕敢自欺其心哉。（『傳習録』中）

『朱子晩年定論』の編纂は、やむを得ずそうしたのです。書簡の年次考証については考慮していませんでしたが、すべてが晩年のものではなくとも、勿論大部分は晩年のものです。しかし、これを編纂した狙いは、自説と朱子説を調停し聖人の学を明らかにすることです。いつも朱子の説を神明蓍龜のように思っており、もしこれと背馳するなら、自分の心はそれに耐えられないので、やむを得ず本書を編纂したのです。……朱子と齟齬するのには我慢できないのが本心です。やむを得ず齟齬をきたすのは、道がもともとそうだからで、もし「直さなかったなら、道は現れない」（『孟子』滕文公）からです。ですから、あなたがおっしゃる朱子と全く異なる点について、私は私の本心を欺いたりはしません。

ここには、『朱子晩年定論』により、朱子説との同一化を図ることで、朱子コンプレックスを解消しようとした陽明が、羅整菴の批判を受けた今、事実として、自己と朱子との相違を認める外ないと考えるようになった、陽明の心の変化が記されている。

夫道、天下之公道也。學、天下之公學也。非朱子可得而私也、非孔子可得而私也、天下之公也、公言之而已矣。……然則某今日之論、雖或與朱子異、未必非其所喜也。……某雖不肖、固不敢以小人之心事朱子也。（同上）

道は天下の公道であり、学は天下の公学であり、朱子や孔子が私物化できるものではありません。公のものですから、私も公の立場から言うだけです。……ですから、現在の自説が、朱子の説と異なっていたとしても、必ずしも喜び受け入れないわけではありません。……私は不肖者ではありますが、決してつまらない人間の心で朱子に仕えたりはしません。

朱子・朱子学を絶対の根拠に、それに自己を同一化する必要はない。ただ、すべての存在の絶対的根拠である道に立っ

て、自己の思索を深め世界観を築いてゆけばよい。陽明は、自らの内に小人の心即ち郷愿の心があることに気付き、その小人の心で朱子に仕えはしないと断言する。

『朱子晩年定論』の序文には、朱子に同一化して自己の存在を見いだした喜びが記されていたが、これこそが越えようとして越えられない朱子との対決を避け、自らを朱子にすり寄せてゆく郷愿の心だった。『朱子晩年定論』は、朱子学者からの批判と、朱子コンプレックスから自己を守るその場しのぎの隠れみのに外ならなかった。その隠れみのを、羅整菴にはぎ取られることで陽明は、ようやく郷愿の心即ち朱子コンプレックスに呪縛された自己に気付き、これを死に追いやることができた。もはや朱子に自己を同一化させる必要はない。朱子コンプレックスを克服して再生した自己は、ようやく道を根拠に、そこに立って思想を構築し、真の自己を見いだすだけである。

（五）　百死千難の体験—自立としての良知説—

陽明の真の自己の発見と確立、これは「致良知」説の提唱によって齎された。

是年、先生始揭致良知之教…（中略）…譬之人有冒別姓墳墓為祖墓者、何以為辨。只得間壙、將子孫滴血、眞偽無可逃矣。我此良知二字、實千古聖聖相傳一點滴骨血也。又曰、某於此良知之説、從百死千難中得來。不得已與人一口説盡只恐學者得之、容易把作一種光景玩弄、不實落用功、負此知耳。（『年譜』五十歳条）

王陽明は、この良知は、祖先のお墓かどうかを子孫の血液を滴らせて弁別するように、千古の昔から、聖人から聖人へと受け継がれて来た、一滴の滴骨血のようなものであり、自らの百死千難の体験の中から獲得してきた、と言っている。

「致良知」の根拠を、自らの命を懸けてきた百死千難の体験においているが、それは「事上磨練」（『傳習録』上）と

説いた陽明が、生死を懸けた体験即ち「事」のなかで、自らの心を磨いてきた結果見いだされた精華であった。

陽明の生涯は、正しく死と隣合わせであった。思想的・心理的には、聖人になろうとして朱子学を実践した揚げ句に病になったこと、龍場という言葉も通じない世界に流され、病気に倒れた従者を看病しながら、一方石墉の中で静座を続けたこと、そして、朱子学者達の激しい批判を避けるために『朱子晩年定論』を編纂したことなど、陽明は常に、命を懸け、自らの実存を問いながら生き抜いて来たのである。また、政治・軍事の場では、廷杖の刑を受けて、一時は息絶えながらも蘇生したり「亦下詔獄、已而廷杖四十、既絶復甦」（『年譜』三十五歳条）、龍場の流刑を終え政界に復帰して六年後正徳十一年、今の江西省・福建省を巡撫することを命じられてからは「陞都察院左僉都御史、巡撫南韓汀章等處」（『年譜』四十五歳条）、軍人政治家として、流賊や正徳十四年の寧王宸濠など、度重なる賊の反乱に立ち向かいながら、陽明は生と死の僅かな隙間を生き抜いてきた。だからこそ「致良知」は、自らの百死千難の体験即ち自己の存在を懸けた実存体験の中から見いだされた、血の滲むような思想だったのである。

四十七歳の陽明は流賊との命懸けの戦いのさなかに、「破山中賊易、破心中賊難（與揚仕徳薛尚誠）（陽明四十七歳）」と、賊を打ち負かすのは容易だが、心の中の賊を打ち負かすのは難しい、という書簡を送っていた。眼前の戦いにおける死の恐怖以上に、自己の存在を脅かす心の賊、それは、かつて朱子学挫折体験によって陽明の心に深く刻み込まれた、朱子コンプレックスに外ならない。陽明は、百死千難の体験を通して、自己の心にある朱子コンプレックスと戦って来たのである。

従って、自己の百死千難の体験こそを根拠に「致良知」説を提唱したことは、陽明が、心の賊即ち朱子コンプレックスを完璧に克服し、朱子に依存することなく、自らによって立つ新たな自己を確立したことのあまりに鮮やかな表明であっ

た。ここにようやく、陽明は朱子を批判克服し、良知自らが創造した関係の場において、真の自己の存在を実感できる、という陽明独自の新たな世界観を築き、朱子からの自立を果したのである。

（六）　終わりに

以上論じてきたように、王陽明の百死千難の体験は、常に朱子・朱子学と関連し、それに対する挫折と克服即ち死と再生を繰り返す心の変容の物語りであった。それは、聖人になることを目指した陽明が、朱子・朱子学に躓きながらも、自己の存在を実感しようと命を懸けた、実存体験の繰り返しに外ならない。だからこそ陽明は、朱子・朱子学を批判克服して、独自の新しい世界観を形成し、また、聖人に「なる」のではなく、人は皆聖人である、[②]という画期的な聖人観を樹立するに至るのである。このように、王陽明の生涯は、まず思想的心理的には、朱子学から出発し、次に挫折により心に刻み込まれた朱子コンプレックスと戦いながら、それを克服するために、「心即理」「知行合一」を説き、終わりに「致良知」を提唱し独自の世界観を展開することで完成する。それは、とりもなおさず、朱子学・朱子からの自立を果すために自己の存在と命を懸けた壮絶なる生涯であった。

注

① 「心即理」「心外無物」「無即事」（『傳習録』上）と説いた陽明は、理そのものである心によって創造された事即ち関係の場において、自己も物も共に存在を顕示する、という新たな事的世界観を構築した。

② 「満街人都是聖人」（『傳習録』）。王汝止等の語。

（広島大学教育学部非常勤講師）

Wang Yangming(王陽明)'s life
— Independence of Wang yangming (王陽明) from Zhu xi (朱熹) —

Keiji Hashimoto

Wang Yangming (王陽明) wanted to become a Shengren (聖人) by the method of Zhu xi (朱熹)'s Gewu (格物). But he was frustrated in his ambition to become a Shengren (聖人). His frustration had constantly influenced his life so much so that he developed a Zhu xi (朱熹) Complex.

And when Wang Yangming (王陽明) got the doctrine of "Zhi liangzhi(致良知)", he said, this doctrine had been derived from his own existential experience. After all, "Zhuxi (朱熹)" and "Existential experience" are essential for him in making his own thought.

Wang yangming (王陽明) has critically examined zhuxi (朱熹)'s thought, and he realized he must create his own cosmology, through all of his life. So I think it was life which Wang yangming (王陽明) wanted to establish by himself inde-

pendent that of Zhuxi (朱熹).